

鈴木 泰 教授

比較金融システム論・イスラム金融



サミュエル・ハンチントン (Samuel Huntington) 教授は、ロングセラーであるその著作「文明の衝突」で、1990年以降の世界を九つの「文明」に分け、日本（日本文明）をそのうちの一つのユニークな文明と分類しています。この著作の衝撃的なところは、今後、西洋文明（米国）、中国文明、そしてイスラム文明が相互に衝突することは避けられず、日本はその衝突の中で、右往左往させられる運命にあると予測されているところです。私は、この「文明の衝突」論から、これからの国際金融制度のあり方を考え、日本の立ち位置を見定めたいと考えています。日本の金融システムから始め、米国金融システム、中国金融システム、そしてイスラム金融システムの制度的特徴を比較し、それぞれの金融システムが、その特徴を活かしつつ調和・共存する（衝突を回避する）ためにはどうすればいいのかを研究しています。最近では、今後、世界の人口の4分の1を占めるようになっていわれているイスラム教徒が、イスラム教の教えに則って取引できる金融、すなわち、イスラム金融を主に研究しています。



イスラム国際大学学長とともに

イスラム金融では、利益も損失も投資家全員でシェアすることが基本原則となっています。投資が成功し利益を上げた場合、投資家全員でそれを分け合い、投資がうまくいかなかった場合は、損失を投資家全員で分担することが原則です。この原則から、イスラム金融では、一定の「金利」を契約し、予め投資家の取り分を決めることが戒められています。利子（リバ [Riba]）を取ってはいけないという原則です。イスラム経済では、ビジネス、特に貿易・交易から収益を追求することは推奨されていますが、「金利」という形で収益を分配することができないため、「売買からの収益」という形で収益が分配されます。イスラム金融は、通常の金融で扱われている「割賦販売」や「リース」のような「モノ」を媒介とした金融が中心となっているところに特徴があります。



イスラム経済大学及び
大蔵省関係者とともに

また、イスラム金融には、過度な不確実性（ガラル [Gharar]）が伴う取引はしてはいけないという原則があります。ビジネスには、多かれ少なかれリスクや不確実性が伴いますので、この原則の適用を巡っては議論があります。一方で、昨今、金融商品の中身が複雑なものとなり、内在するリスクが投資家にとってよくわからない商品も開発されています。2007年に起きた米国のサブプライムローン危機（リーマンショック）も、複雑な証券化スキームにより、内在するリスクがわからないまま、住宅貸付証券に過大な投資が集中したことがその原因となっています。内在するリスクがよくわからない金融取引に対して、イスラム金融は慎重な態度を維持しています。実際、イスラム銀行が被ったリーマンショックの影響は軽微なものでした。金融危機を国際的に広げないための防波堤の役割をイスラム金融が担っているところがあり、そうした役割を国際金融制度に組み込むことを考えています。



シャリア（イスラム法）遵守を指導する
国家シャリアボードにて



イスラム国際大学
新学部長とともに

学部

国際経営学部

研究分野

銀行論、イスラム金融論、金融マクロ政策、
制度政治経済学、経済哲学

アドレス

szkya@apu.ac.jp